
彼は友達

のなみこころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は友達

【Nコード】

N4813B

【作者名】

のなみこころ

【あらすじ】

主人公・真央は、福岡育ちの19歳。高校卒業後、1年間浪人した末、東京の大学に進学。男友達・圭太とは、高校時代、周りに付き合っているのかと思われるほど、仲が良く…。私のこと、好きかも？

第1章：上京

4月1日。

東京は、快晴だった。

真央は、今朝、飛行機に乗り、新しい街へとやってきた。

数時間前まで、生まれ育った町にいた真央。

地元・福岡は、小雨がぱらついていたので、そんなことでも、東京にきたんだということを実感した。

真央が、東京の住処として選んだのは、笹塚だった。

笹塚を選んだのは、M大学に徒歩で通える距離だということはもちろん、憧れの新宿や渋谷・原宿に容易に出られるからだった。

3階建ての2階。

6畳の1K。ロフト付。ユニットバス。

笹塚駅まで徒歩10分。

家賃65000円。

近くには、コンビニやスーパーや商店街もある。

オートロックこそないが、治安のいいところである。

立地条件を考えれば、かなり、おトクな物件であるが、東京の家賃に疎い真央の両親は、初めは難色を示していた。

真央も、高いと思ったが、「どうしても、ここがいい」「バイト、がんばって、できるだけ負担をかけないようにする」と譲らず、結果、

真央の粘り勝ちだった。

5コ上の真央の姉・由実は、一人暮らしを反対され、泣く泣く、地元の大学に進学し、片道1時間半かけて通っていた。

だから、「お父さんたちは、真央にはいつも甘いんやもん」と、かなり、不服そうだったが、真央は、聞こえないふりを決め込んだ。

真央が、さっき届いた荷物の梱包をといてみると、真央の携帯電話が鳴った。

真央の携帯電話は、2つ折で、ほとんどデコレーションもほどこしていないし、ストラップもついていない、シンプルなものだった。

背面ディスプレイには、自宅という文字が浮いていた。

「もしもし」

『あー、お母さん』

そっけない母親の声。
照れ隠しだ。

「うん」

『どっ?』

「うん? 今ねー、さっき荷物来たけん、整理しよったところ」

『ホントね?。進みよつかね?』

「うん。ぼちぼちね」

『東京は、今日、天気がいっち、さっき、天気予報で言いよったよ』

真央は、窓の外を見た。

家々の間からかすかに見える近所の公園の桜が見えた。

「うん。すごい天気いいばい」

『そうね。あ、お父さんに代わるね』

「うん」

『おー真央か？』

照れくさそうな父親の気持ち、声からも伝わり、真央は、小さく笑った。

「うん」

『そっちは、人が多かるうのー』

「うん。多いねー」

真央は、羽田空港からの道程を思い返す。

『寒くないか？』

「寒くないよ。福岡とあんま変わらんねー。今日とか、こっちのほうがあったかいばい」

雨のため、肌寒かった福岡を発つ時に、ジャケットを着ていたが、快晴の東京では、若干、暑く感じた。

『そうなんか』

「うん」

『入学式は、本当に、行かんでいいんか？』

「うん、いい。だって、2人とも仕事やん」

『そやけどの〜』

真央と離れて早くもさみしくなったらしく、どうにかして、会いたいようだ。

「うん、いいっちゃ。大学やし、多分、親同伴じゃない人、多いと思うけん」

『そうかの〜？』

「そう、そう」

『ゴールデンウィークは、帰ってくるんか？』

（まだ、そんなんわかるワケなからうもん）と、電話越しに、母親の声が聞こえ、真央は、笑った。

『また、電話するけんの』

「うん」

そうして、あっさりと、電話が切れた。

6時過ぎ。

おおまかに、片付けが終わり、近所の商店街に、買物に行った。

（お金、おろしたほうがいいんやろか？）

食材や日用品を買ったら、真央の財布の中身は、寂しくなった。

（でも、とりあえず、食べるのには困らんように買ったし、なんとかなるよね！？）

そう言い聞かせ、とりあえず、自分の部屋に帰った。

「さーって。うーっはん、うーっはん」

実家で暮らしていた頃、ほとんど家事を手伝ったことのなかった真央のレパトリーは、当然のことながら、少なく、今日の夕食は、カレーとサラダだ。

「いったきまーす！」

きれいとは言い切れない盛り付けのサラダと、あまりおいしそうな

艶をしていないカレーであったが、真央は、自分で食事を作ったことに満足していた。

「やっぱり、なんか違うなあ」

母親の作るカレーとは違い、イマイチの出来に、真央は、がっかりした。

（なんか、さみしいな）

今まで、共働きの両親の下、独りきりで、食事を摂ることは、たまにあった。

しかし、実家で一人で食べるさみしさと、一人で暮らす部屋で独りで食べるさみしさは、大いに、違った。

（あ、テレビつけようっと）

テレビの音と灯りで、一気に、部屋が明るくなった。

第2章：男友達

真央の東京生活1日目が終わろうとしていた。

（お！？）

お風呂から上がった真央は、髪を拭きながら、携帯電話の着信お知らせのランプが点滅していることに気づいた。
メールが1通届いている。

真央は、受信ボックス内で、いくつかのフォルダ分けをしている。
メールは、友人のフォルダに入っていた。

（誰やる～）

髪を拭く手がお留守のため、雫が、携帯のディスプレイに、ポタポタと落ちたが、真央は、構わなかった。

メールの送信者は、圭太だった。

件名：おつす（*。。）b

本文：いよいよ、真央も、東京デビューか！

（は？これだけかよ！…まあいいや。返信してくるだけマシやね）

圭太は、あまり、メールの返事を送らない男だった。

送ってきて、タイムラグのある人間だったので、返信が、数時間内に届くということは、稀だった。

何度も、内容を校正しながら、真央は、メールを送信した。

件名：おいつす（　　）

本文：そうさー。オラも、東京さー、出てきただよ。

メールの送信後、数分も経たず、電話が入った。

背面のディスプレイには、真央が、高校の卒業式に撮った圭太のはにかんでいる顔が映っていた。

「うお!？」

（なんだ、なんだ。電話かよ）

お互いに、電話は苦手なほうだったので、向こうから電話がかかってきたことは、真央には、なかった。

『おいゝつす!』

「おいつす!」

『元気しとったかー?』

「うん。圭太は?」

『めっちゃめっちゃ元気』

真央の耳に、車の走る音などが届いた。

「外？」

『おお。外、外。今、バイトから帰りようところ』

圭太は、1年近く前から、家庭教師のバイトをしていた。

「圭太先生、お疲れ様ですう」

『ハハ。…あゝ、マジ疲れた。今教えようコ、全然勉強してくれんでさー』

「なんか、そんなん言いよったね」

真央は、圭太が女子中学生相手に、てこづっている姿を想像すると、おかしくて、クスツと笑った。

『何、笑いよんか。マジで、大変なんぞ』

「そうやるねー」

『勉強は、せんくせに、「まさか、童貞じゃないよね？」とか最初の頃に言われたし。今日なんか、「先生、私、女として、魅力あるでしょ？」って言われた！』

「マジで〜？」

『だけん、「勉強のできない女は、好きじゃない」とかって言っちゃった』

「あはは。可愛いそう」

『でも、堪えんみたいで。相変わらず』

「だけん、いつまで経っても、勉強できんのやろっね」

『うん、オレも、そう思う』

『あ、お前、明日、暇やる？』

「は？何、それ。なんで、暇っち決めつけよんよ」

『どうせ、こっちに出てきて、そんなすぐに、忙しいワケなからうが。せめて、学校始まらな。暇やろっが』

「何、言いよん。私はね、今日、東京来たばかりなんばい。明日から、色々、東京に慣れな、いけんとよ」

『おー、それたい、それ』

「は？」

『だき、オレが、案内しちやる』

「は？？なんなん、それ」

そんなことを言いながら、真央の顔は、おおいに、にやけていた。無意識のうちに、真央は、髪をくしゃくしゃとさせる。照れくさい時に出る、彼女の癖だった。

『約束したやんか。M大に受かったら、合格祝いに、東京案内してやるって』

確かに、M大学の合格発表前日に、そんなメールのやりとりをしていたが、真央は、圭太のことだから、冗談にしているかと思っていたのだ。

「わー、マジで！？チヨーうれしんだけどお」

『わっ、さっそく、似非東京人になりやがった』

「明日さ、明日さ、東京人ごっこしようや」

『なんや、そら』

「方言使わんで、喋るん」

『は？お前が負けるに決まっとうやん。オレのほづが、東京に1年も長くおるんぞ。昨日今日に、東京に来たヤツに、負けるワケなかるうが』

「言っただねー。負けんばい！」

『バイバイ言っとけ。はい、ばいばいバイっ』

「あんたも、地元帰ったら、使おうもん！」

『オレが使うワケないだろ』

「うわー、ムカつくー」

『おお、ムカついとけや』

どちらからともなく、二人で、大笑いした。

『やつぱ、お前と話しよったら、飽きんわ』

真央は、その言葉を聞くと、大いに嬉しく、それでいて、少し切なかつた。

『じゃあ、どこで待ち合わせするか？お前は、どこがわかるんか』

「ウチ、笹塚なんよね。だけん、新宿なら、1本やね」

『あー、新宿な。ちなみに、オレも、1本』

圭太の最寄り駅は、JR中野だった。

『時間は？11時でいいか？』

「うん、いいよ」

『おっけ。じゃあ、明日な』

「うん」

『真央』

「ん？」

『かつこよくなつたオレに、惚れんなよ』

「は？バカじゃないん？」

真央と圭太は、笑った。

『じゃーの。おやすみ』

「おやすみ」

第3章：女友達

真央は、圭太との電話が終わった後、笑いがとまらなかった。

「うわー、どうしよっ」

「きゃあ、どうしよっ」

真央は、嬉しくて、部屋中を、転がっていた。

ガンッ！

テーブルの脚で、頭を、思いっきり、ぶつけた。

「ぎゃあっ！ いったーあ…」

一瞬、眉をひそめたが、真央は、それでも、笑みがこぼれていた。後頭部をさすりながら、傍から見たら、不気味なほど、真央は、笑っていた。

（誰かに、この幸せを伝えたい！…あ、かおりだ！）

真央は、そのへんに転がしてあった携帯電話を手にした。

かおりは、真央と小中高を共に過ごした仲で、今は、長崎の大学に通っている。

（あ、電池やばい）

さっきの通話で、真央の携帯電話は、充電を要していた。

真央は、充電器のスタンドとコードを切り離し、直接的に、充電をしながら、そのまま、かおりに、メールを送った。

件名：チヨー最高！

本文：チヨー嬉しいんだけどお（　　）

かおりからは、10分ほどして、返事がきた。

件名：はっ？

本文：なんだよ。なにがあった？

件名：でえと（はあと）

本文：圭太と明日2人で遊ぶ

メールを送信したとほぼ同時に、かおりから電話がかかった。
背面ディスプレイには、かおりの変顔が映っている。

『なに、なに、なに。ついにかよー』

「そう、ついに！ぐふふふ」

『うわっ！真央が、壊れた』

「だって、チヨー嬉しいんやも〜ん」

『1年かけて、脇目も振らず勉強して、東京に行ったかいあったね
ー』

そう、1年前、高3の真央は、滑り止めではあったが、地元の短大に合格していたのにもかかわらず、なんだかんだと理由をつけて、浪人したのだ。

もともと、地元の四年制大学が第一希望だったのだが、これまた、

なんだかんだと理由をつけて、都内の大学に、志望校をすべて変更したのだった。

『あ、そういえば、2人で遊ぶのは、初めてじゃない？』

「そうなん、そうなん。そうなんよー」

真央は、嬉しさのあまり、身震いを起こす。

『よかったねー。ここまま、くつついちゃえよ』

「あー、私も、できることなら、そうしたいよー！」

『じゃあ、明日、押し倒しとけ』

「そんなんでできるワケないやんっ！」

『まあそうやね。そうじゃなかったら、ここまで、ずるずる、友達
続けてないよね』

「うん……」

『とりあえず、2人で遊べるようになっただけでも、進歩やし、が
んばり』

「うん」

『じゃあね、もう寝るけん』

「うん、おやすみ」

かおりは、真央の言葉を最後まで聞く前に、電話を切った。

真央は、少しだけ冷静になった。

圭太から、さっき言われた『やつば、お前と話しよったら、飽きんわ』という言葉、このような台詞を、真央は、何度となく、聞かされている。

圭太と真央は、高校3年間、同じクラスだった。

とても、仲が良く、よく「付き合っているの？」と言われた。

真央は、気づいた時には、圭太のことを好きになっていたが、関係が壊れるのが怖くて、自分の気持ちを伝えたことはなかった。

圭太は、中1の頃から付き合っていた彼女と高2の時別れ、それ以来、彼女はいなかった。

真央は、圭太が自分のことを、友達以上に思っているようには思えなかった。

もちろん、微かな期待を抱いていないワケではなかった。

しかし、「良好な関係が崩れるくらいなら、このまま、仲の良い女友達でいれたら、それでいい」「いつか、圭太が振り向いてくれたら、それが一番いい」そんなふうに思っていた。

圭太は、高3の秋頃、急に、志望校を変えた。

それまでは、地元の大学に行くと、真央たち友人はみんな、思っていたし、本人も、そう言っていたのだった。

しかし、実は、両親から反対されていただけで、圭太自身の志望校は、ずっと、東京の大学だった。

秋口に、両親から「1校だけなら、受験してもよい」という条件付きの許しを得て、偏差値との兼ね合いもあって、圭太は、H大学を志望校にした。

真央は、どちらかといえば、地元志向が強く、実家を離れる気はなく、また、圭太が、最終的な模試でも、H大学は、D判定だったので、心のどこかで、圭太は、地元に残ると思っていたのだった。

それが、彼は、H大学に合格をし、東京に行ってしまった。

真央は、5校受験したうちに、一番行く気なかった短大にしか合格できなかったということもあり、浪人を決め、1年後、すべて、都内の大学に的を絞った。

結果、唯一、補欠で合格したM大学に入学して、現在に至るというワケだ。

「あーーーーー！」

真央は、もやもやした気持ちを払拭するように、奇声を上げる。

「もう、寝るぞ！」

真央は、まともに、髪を乾かさずに、ふとんに入った。

しかし、また、明日のことを考え始め、なかなか、寝付けなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4813b/>

彼は友達

2010年12月17日02時47分発行